

令和3年（2021）

■ 7月2日（金）

梅雨空が続き、2つの調査区どちらとも、水と闘いながらの調査です。

第1区西端の南西側にあるやや大きな落ち込みは、真福寺泥炭層遺跡発見の発端となったため池の跡です。そしてその南北に二つずつある水色のところは、大正から昭和にかけて行われた泥炭層遺跡発掘調査の調査位置想定箇所です。その内の第1区西端すぐ北にある小さな調査位置想定箇所は、昭和40年（1965）に慶應義塾大学が行った発掘調査の想定範囲ですが、実は昨年度の調査で、軸線がほぼ同じになる新しい掘り込みがあるらしいことがわかっていました。ただしそこは、さらに新しい掘り込みに壊されていて、昨年度の調査の範囲では、「かもしれない」と心の奥底でつぶやく程度の確度しかありませんでした。今年の調査でその部分をさらに深く掘り下げ始めたことで、慶應義塾大学の発掘調査区が及んでいた可能性が高まってきました。

縄文時代晩期の堆積土層が多量の土器を伴って累積していた慶應義塾大学調査地点。縄文時代晩期土器研究を大きく進展させたこの調査と近似した様相は、今回の調査区内でも確認されています。日本考古学発展の歩みにも関わる成果も挙げながら、今年の調査がいよいよ本格化していきます。

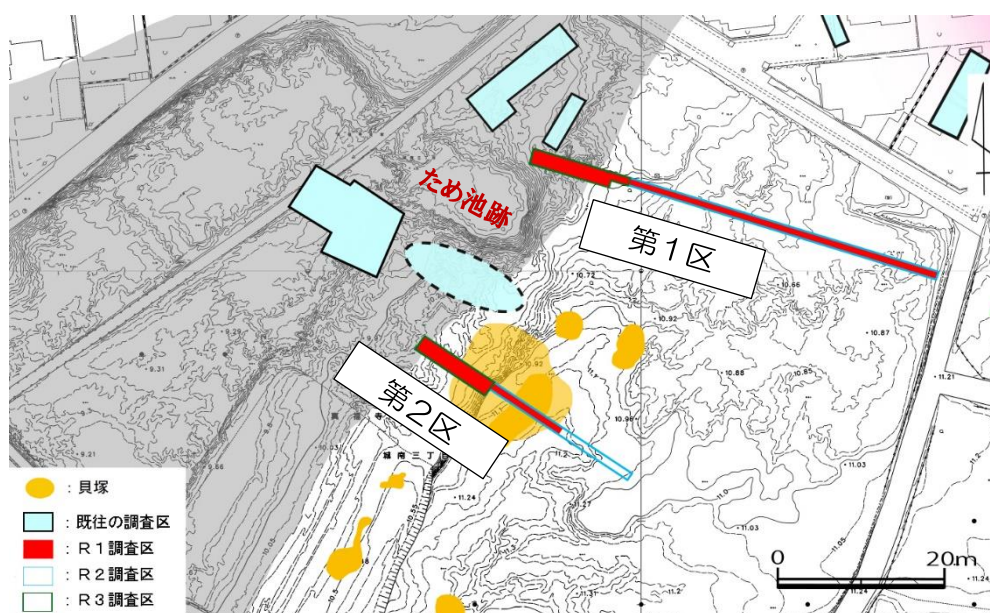


図1 調査区の位置

令和3年（2021）

さて、第1区（北側の調査区）の西端部（谷側）では湧水が見られたため、南西角を一部深掘りし、調査区に溜まった水をそこに集めながら調査をしています（写真1）。深さ120cmほど深掘りしましたが、まだ地山は見られません。

その後、西端部から3mほど東側のローム質の斜面堆積層を掘り下げたところ、杭と思われる材を検出しました（杭2 写真2、3）。黄褐色のローム質土中に打ち込まれているようです。

なお、杭と思われる材は、慶應義塾大学の調査区と思われる調査区の南西角を深掘りした際にも見つかっていました（写真4の水没中の黄色印 杭1）。



写真1 調査範囲南西の深掘り



写真2 杭と思われる材の検出状況（1）



写真3 杭と思われる材の検出状況（2）

令和3年（2021）



写真4 杭の検出状況

深掘り地点は攪乱（かくらん）が深くまで及んでおり、下層からビニール片や鉄くすなども出土していたため、杭も現代のものと思っていました。

ただ、黄褐色土中から今回検出された杭と近接していることから、杭列の可能性も念頭に置きながら、調査にあたりたいと思います。

連日の雨により、杭も含め調査区は現在、水没中ですが、来週から水中ポンプを導入し、谷部の調査を本格化させて参ります。